

The Women's Studies Association of Japan

発行 日本女性学会
事務局 〒272-0023
千葉県市川市南八幡1-16-24
TEL 047-370-6068
FAX 047-370-5051
ホームページ
<http://www.joseigakkai-jp.org/index.htm>

学会ニュース

日本女性学会
第114号 2008年9月発行

目次

*会員に送付しているペーパー版の「学会ニュース」とは、内容が一部異なります

2008年度日本女性学会大会報告	海外学会交流	6
シンポジウム	韓国女性学会開催のご案内	6
ワークショップ	会員の著作紹介	6
個人研究発表	幹事会から	7
ビデオ上映・懇親会	研究会募集 / 30周年企画委員募集	
日本女性学会 第29回年次総会 議事次第		5

2008年度日本女性学会大会 報告

日時：2008年6月14日（土）・15日（日）

会場：アピオあおもり

共催：青森男女共同参画センター

シンポジウム「男女共同参画と格差社会」

発題者：海妻径子・皆川満寿美・小山内世喜子

コーディネーター：船橋邦子・伊田広行

シンポジウム報告

船橋邦子

今回のシンポジウムの趣旨は、新自由主義のもとでの男女共同参画政策の現状、「格差社会」との関係、それらの地域での実態を明らかにし、格差是正に向け、どのような政策や運動が可能か、について議論することだった。

男女間、男性間にも格差は以前から存在していた。いま、なぜ「格差」論ブームなのか、という問いから始まった海妻径子さんの回答はテーマである『(日本型)男性労働の縮小あるいは消去』にあった。

格差論争は、日本の男性労働者にとっての特色だった安定した終身雇用、年功序列賃金が崩壊し、そこから排除された男性不安定労働者の急増による可視化で始まった。海妻さんは1990年代以降の「格差」をめぐる議論を時系列的に

詳細に整理し、なにが問われたのかの意味をとらえなおす作業の中で、「男性不安定労働滞留者」の存在をめぐる議論とフェミニズムとの交差点を解明する試みをされた。しかし結果的には新しい不安定さをあぶりだしたものの、不安定男性中心の貧困論においてジェンダーの視点は欠如し、男女間格差や拡大する女性の貧困化がまたもや見えなくなっている現状であること、不安定労働運動が主婦との差異化をはかろうとする理由などの報告がなされた。

皆川満寿美さんからは最初に、2005年12月に閣議決定された第2次男女共同参画基本計画策定以降の「男女共同参画政策」の現在に至るまでの動向が、新聞記事及びインターネット上の情報をもとに報告された。安倍政権下で誕生した『子どもと家族を応援する日本』重点戦略会議の内容と重なり合う福田政権下の「ワーク・ライフ・バランス(WLB)」政策は、労働市場改革、少子高齢社会対応、男女共同参画の三

つ巴の中にあり、WLBが単なる(男性の)労働時間の短縮、テレワークではなく、均等待遇の確保となるよう監視と提言が重要であり、さらに格差社会是正の方向性として税制改革の提起があった。

青森県男女共同参画センター副館長小山内世喜子さんからは青森県の格差および指定管理者制度のもとでのセンターの現状が語られた。小山内さんは経済的格差、教育格差、情報格差、医療格差、男性の自殺率の高さなど数値で示され、その背後にある性別役割意識を指摘された。新自由主義政策の一環である指定管理者制度導入によるプラス面としては、女性の再チャレンジの場の提供やワーク・シェアリングの考え方に立ってパートの女性職員の社会活動との両立の確保などが挙げられた。マイナス面としては低賃金、過重労働などが指摘された。その後の議論では、ジェンダー格差など問題解決の場として指定管理者制度となったセンターが、いかに力を発揮していくかなど問題提起がなされたが翌日に持ち越された。

この外、「あっても良い格差とは」「主婦と男性の不安定労働運動の連携の可能性」等、重要ないくつかの質問が会場から出されたが多くの課題が未解決のまま時間切れとなった。

しかし、障害のある女性による「シンポの議論には『私たちの存在』が視座に入っていないのでは」という会場からの最後の発言に、改めてリベラルフェミニズムの内包するネオリベリズムの危険性について、より自覚的であること、男女共同参画を推進することで「格差」も含めてどのような社会を私たちは創り出そうとしているのか、について議論を深めていくことの重要性を痛感させられた。

シンポジウムに参加して

国場杏子

「男女共同参画」が、現在の「格差社会」の進行に歯止めをかけるために、何らかの有効な手を打てるのかどうか、あるとすればそれはどういったものなのか、その片鱗がみえるのではないのかという期待を持って、今回のシンポジウムには参加した。

海妻氏は研究者としての立場から、現在の「格差社会」の有り様を理論的に展開し、皆川氏は政府の「男女共同参画」の概観と方向性をactivismのスタンスで提示、小山内氏は、青森県の現状をふまえた上でまさに「男女共同参画」推進の拠点施設としての現状報告をした。それぞれの立場からの報告は、「男女共同参画」と「格差社会」を多角的に描き出し、非常に興味深いものであった。特に皆川氏は、日本にお

ける「ジェンダー平等」実現のためには、政府の動きに対し「監視と発言が必要」であり、かつ「私たちがもつとつながること」の重要性を指摘していた。それは至極当然のことでありながら、しかしなかなか進まない(あるいは「できない」?)連携といったものを感じた。

全体をみると、発表者それぞれが提示した視点や問題点等が時間の関係上、相互に結び付けられず未消化で終わってしまったのは残念である。「男女共同参画」と「格差社会」に関しては、さらなる議論展開が望まれる。

シンポジウム感想

「シングル・ケア従事者を議論の中心に」

古久保さくら

非正規・不安定雇用化する中で、安定した未来や家族(近代家族に限る必要はないが)を形成・維持できない(という不安を抱える)人々による、一方で性別役割分業への逃げ道を残しつつ、もう一方で男女平等の名の下に競争社会で勝ち進んでいく(ように見える)女性たちへの怨嗟の声に対して、フェミニズム/女性学はいかに応答するのか。「闘う敵が違う」という一言をどのような説得力と行動力を伴って語る事ができるのだろうか。

この問いへのヒントを与えてもらえるのではないかと。このような期待をもって参加したが、女性学/男女共同参画政策が、きわめて都市新中間層的なジェンダー問題に軸足を置いて発展し続けてきたのではないかとあらためて感じた。

格差社会をジェンダーの視点で問い直すのであれば、シングルマザーの問題を議論の中心に据えるべきではなかったか。格差が世代を越えて再生産されてしまうサイクルをいかに断ち切ることができるのか、そこにフェミニズムはどう介入していけるのか。再生産労働を担当しながら自己とケアする対象の糊口をしのぐための生産労働に従事すること、その両立の困難さを社会的に解決する道をいかにして求めていくのか。シングルで育児や介護を担当する人間像を標準とした形でのワークライフバランス政策を実現していくために、リアルポリテイクスの次元でも、あるいは社会理論の次元でも、今後も議論を続けていければと思う。

日本女性学会大会感想

阿部未華

2008年6月14日・15日に青森市で開催された日本女性学会に参加した。私は岩手大学において海妻径子先生のもので

ジェンダー論を学んでいるが、今回、学会という場に初めて参加し、通常の授業では聞くことができないさまざまな立場の発表や意見を聞くことができて、非常に刺激を受けた。

初日は「男女共同参画と格差社会」と題された大会シンポジウムがあり、2日目は個人研究発表・ワークショップが行われたが、私は初日のシンポジウムで出された論点をより理解するために、ワークショップ②(シンポジウム「男女共同参画と格差社会」の論点を深めるために)に参加した。シンポジウム及びワークショップを受けて得られた学びは、大別して次の3点が挙げられる。①現在の格差社会をめぐる議論において、何が新しい問題と言えるのか、②政府の推進する男女共同参画としての「ワーク・ライフ・バランス」はどのように評価すべきか、③地域の女性センター(男女共同参画センター)の役割、である。

①に関しては、「(日本型)男性労働の縮小あるいは消去」と題して発表された海妻先生の報告に依拠するものである。1991年から2006年までの、格差社会・非正規雇用化・若者の勤労意欲をめぐる論争の推移を精緻に見ることによって、これまでも男性不安定労働者が存在していたにも関わらずなぜ格差が問題化されなかったのか、また現在の「新しい不安定さ」とはどのような状況なのかという視点を得た。加えて、「新しい不安定さ」において若年男性不安定労働者とパート労働に従事する主婦はなぜ差異化させられているのかという問いは、非常に重要であると感じた。それは、本来であればフリーターやワーキング・プアなどの是正を求める男性運動と、従前より展開されてきた女性運動は、同じ解決目標を抱えているのだから、共闘すべきであるのに、その共闘を可能にする認識を阻んでいるのは何なのか、という問いにつながるからである。この問いに関しては、シンポジウムにおいて答えが出されたものではないので、今後も継続して考えたい。

②、③に関しては、現在、実際に行われている(行われようとしている)政策や、それを反映しての女性センターの活動の現場を知り、私たちが大学で学んだことを地域で活かすための、大きなヒントとなった。特に、コーディネーターである船橋氏の次の問いかけが、最も考えさせられた。ワーク・ライフ・バランスを実施して恩恵を得られるのは誰なのか、女性センターを利用している人は誰なのか、本当に女性センターの支援を必要としている人は誰なのか。去る6月22日に開催された「いわて男女共同参画フェスティバル2008」(岩手県男女共同参画センター主催)において、私たちが分科会を主催し、一般の方を対象としたワークショップを行った。分科会終了後に挙げられた反省・課題点は、船橋氏の問いかけがより実感させられるものであった。したがってこれから、本当に女性センターの支援を必要としている層にそれが届けられるような企画を考

え、実践していきたい。女性センターのような公的機関ではフォローできない草の根の支援活動を、より小さな支援団体が実践し、センターはそれらの団体を有機的に結びつけ、支援するシステムを整備していくことが必要であると感じた。

ワークショップ報告

ワークショップ「男女共同参画と格差社会」の論点を深めるために

伊田広行

前日のシンポジウムを受けて、参加者全員に意見を言ってもらったあと、自由討論となった。格差社会に対して何ができるのか、格差とジェンダー不平等において多様な層の連帯を阻んでいるものはなにかということをはっきりとしたいとコーディネーターは考えたが、参加者全員に発言をしてもらうことを重視したため、多様な意見が並列的に出される段階で時間切れとなった。ただし、結果的には、女性負け組の一部が結婚によって「脱出」をはかっていることが問題の潜在化をもたらしている、男性負け組には結婚による脱出がなく女性と連帯したい、ジェンダーの権力作用はつねに男性格差を女性問題の無視・軽視で乗り越えようとするのではないか、ダメ男が反権力にならずに再統合されている、勝ち組/負け組という分け方は道具に過ぎず、実際は多層から成り立っておりそれぞれに問題を抱えている、男性の働きすぎも含めフェミが大きな構想で対抗の構想を打ち出すことでこそ連帯が成り立つ、といった関連した意見が出された。

その他、出た意見としては、青森の地の現状に基づいた具体的議論が必要、グローバリズムの中で外国人女性も射程に入れるべきだが現状はまったく不十分、ワーク・ライフ・バランス(WLB)をめぐる政府の審議会などの話は政権の議論に引きずられすぎではないか、障害女性の人権擁護や居場所に男女共同参画や女性センターはなっていない、センターが男性の料理教室など骨抜きのものになっている、WLBがよいか悪いかというシンポの問題の立て方は、今あるものをどう少しでもよくするかという設定にすべきだった、WLB論は現状では勝ち組共働き男女のものでしかない、現実の大学では文科省の枠によって勝ち組女性養成という側面を持っている、勝ち組たちもしんどいという側面ある、専門職女性も安く使われている、構造強制の中で選べない場合が多いのに、個人の選択の問題にされていることを批判すべき、などがあった。

ワークショップNPO法人青森県男女共同参画 研究所「メディアを活用した男女共同参画の理 解普及活動への取り組み」

佐藤恵子

当NPOのワークショップでは、前半に研究所のメディアを活用した取り組みなどを紹介し後半には参加者と意見交換を行った。

はじめに、当NPOがメディアを活用した取り組みを展開するきっかけとなった青森県のメディア調査研究、それ以降の地元紙2紙に日常生活から題材を取った男女共同参画の視点でのエッセイ連載、県内7自治体広報誌の男女共同参画コーナーへのエッセイの無料提供、日本女性学習財団発行の月刊情報誌「ウイラーン」への寄稿、会報・HPによる情報発信など多様なメディアの活用事例を紹介した。そして、このような取り組みを可能にした要因として、会員の男女共同参画に対する認識の一致、各々が居住している県内各地で中心となって活動しながら相互支援・交流し、継続的な研修によるレベルアップを図ってきたことなどを指摘すると共に今後の活動の課題や方向性について報告し前半を終了した。

後半の意見交換では、約20人の参加者から「メンバーの目的意識や結束の固さに驚くと共に、事務所を持たずにこれだけの活動を可能にしている組織運営に感心した。参考にしたい。」「明確な戦略に基づき地域に密着した戦術で、しかも県内のネットワークを構築して取り組んでいる姿勢に感服。積み重ねの重要性を再認識した。」

「エッセイなどは冊子にまとめることを勧める」等々様々な意見が出され、終了時間いっぱいまで活発な意見交換が行われ、今後の男女共同参画推進につながる有意義なワークショップとなった。

ワークショップ「子どもへの暴力防止教育アニメ『ママのバンソウコウ』(試作品)試写会と暴力防止教育について」

内海崎貴子

本ワークショップでは、ワークショップの企画者から、子どもへの暴力防止教育教材製作に至った経緯とこれまでの調査研究活動についての報告があり、その後、NPOPlanning製作の、5歳から8歳の子どもの対象とした暴力防止教育教材アニメ『ママのバンソウコウ』を視聴し、参加者全員で意見交換をおこなった。

このアニメは、父親が母親に暴力をふるう家庭の5歳の男

の子が、通っている幼稚園の先生に、「パパがママを殴る」という事実と「僕はそれがいやだ、怖い」という気持ちを伝えられるようになるまでの様子を描いた作品である。映像関係の専門学校在学学生による製作のため、アニメの完成度は決して高いとはいえないが、DV家庭の子どもの視野に入れた、暴力防止教育教材の必要性を考えるきっかけになったと思われる。

意見交換の際には、『ママのバンソウコウ』製作にあたって参考にしたという、韓国の暴力防止教育アニメ『トハの夢』も視聴し、両者の比較や日韓のDVに対する施策とその背景の違いなどについて、様々な意見が出された。学部学生4名を含めてワークショップへの参加者は7名と少数であったが、この作品を子どもに視聴させることへの問題提起が出されるなど、有意義な意見交換であった。

個人研究発表

第1分科会 パネル報告:境界のクエア

- 〈日本〉を日本から切り離す 川坂和義
- 多文化(共生)をクエアする クレア・マリイ
- グローバル・クエアとホモセクシュアル・エグザイルの間で 清水晶子
- フェミニズム国際法学とクエア 谷口洋幸

第2分科会

- 文部省『新教育指針』(1946)の中の性特性論と階級論—戦後の女性教員運動に与えた影響 木村松子
- 女子大学における情報教育のあり方と可能性 橋本ヒロ子・亀田温子
- 保育者のもつジェンダー意識に関する研究—幼稚園教諭への調査から 細井香・江島絵里子

第3分科会

- 市民活動の展開と女性労働 高原幸子
- 女性・男女共同参画推進センター事業系スタッフに必要な能力とその開発発揮を促進する組織・機関の要件 内藤和美

第4分科会

- 理系女性研究者の労働と生活—社会的排除とジェンダーをめぐるEUの政策 富永貴公

- 大学職場の男女平等実現のためのストラテジー
川島弓枝・朴木佳緒留・近江戸伸子
- 公務の市場化とNPO—指定管理者を担うNPOの
実践から
渋谷典子

第5分科会

- 故郷を想い描く難民女性たち—パレスチナ女性のオー
ラル・ヒストリーが語る離散経験
清末愛紗
- ネパールのネワール族女性における「開発」の
内発的展開とジェンダー構造の変化
竹内愛

第6分科会

- 結婚選択におけるブルデュー理論の適用
—階級軌道と個人軌道
亀井あかね
- 男性誌における外見啓発メッセージの根拠となる
記号的女性の描かれ方—異性愛規範の強調と矛盾
吉仲崇
- 昭和戦中期女性文学における“戦争協力”の再検証
根岸泰子

ビデオ上映・懇親会

例年通り、総会の間、懇親会に出席される非会員の方々を対象にビデオ上映会を行った。今年は「30年のシスターフッド—70年代ウーマンリブの女たち」(山上千恵子・瀬山紀子監督/2004年)を上映した。

懇親会は総会終了後、会場のアピオあおもり内で開催され、青森の郷土料理のケータリングを受けて歓談した。生の若竹に独特の魚のソースをつけていただくなど、地元の人も最近では食べなくなっているという、美味しく滋味にあふれぬずらしいお料理を堪能した。参加者は非会員を交えて32名。

日本女性学会 第29回年次総会 議事次第

日時: 2008年6月14日(土) 17:00~18:00

会場: 青森男女共同参画センター 大研修室1

開会(司会 千田有紀幹事)

議長と書記の選任(司会 千田有紀幹事)

議案1. 2007年度活動報告

- (1) 総括(井上輝子代表)
- (2) 会員の動向(〈庶務〉海老原暁子幹事・釜野さおり幹事)
- (3) 2007年度大会および総会の開催(〈庶務〉海老原暁子幹事・釜野さおり幹事)
- (4) 研究会の開催(〈研究会〉伊田広行幹事)
- (5) 学会誌の編集・刊行(〈編集委員〉千田有紀幹事・船橋邦子幹事・吉原令子幹事)
- (6) 学会ニュースの発行(〈学会ニュース〉伊田久美子幹事・木村涼子幹事)
- (7) 日本学術会議(〈学術会議〉内海崎貴子幹事)
- (8) ホームページの運営(〈HP〉風間孝幹事)
- (9) 学会誌の販促(〈販促〉武田万里子幹事)
- (10) 幹事会の開催(〈庶務〉海老原暁子幹事・釜野さお

り幹事)

(11) 第15期幹事選出選挙の実施(〈選挙管理委員〉武田万里子幹事・釜野さおり幹事)

議案2. 2007年度決算報告(〈会計〉合場敬子幹事・佐藤文香幹事)

議案3. 会計監査結果(〈会計監査〉新田啓子・内藤和美)

議案4. 日本女性学会規約の改正案(〈庶務〉海老原暁子幹事・釜野さおり幹事)

議案5. 第15期幹事選出選挙 選出結果について(〈選挙管理委員〉武田万里子幹事・釜野さおり幹事)

議案6. 2008年度活動方針・活動計画(〈第15期代表幹事〉木村涼子)

(1) 活動方針

(2) 活動計画

議案7. 2008年度予算案(〈会計〉合場敬子幹事・佐藤文香幹事)

議案8. 第15期会計監査の選出について(〈第15期代表幹事〉木村涼子)

議長の解任(司会 千田有紀幹事)

閉会(司会 千田有紀幹事)

海外学会交流

マドリード世界学術女性学会議(WW08)参加記

海老原暁子

Equality is not a Utopia とのテーマのもとに、7月3日から9日までスペインはマドリードで開かれた世界学術女性学会議に参加した。オープニングのパネルディスカッションには、開催の実質的な母体であるコンブルーテンス大学の学長や男女共同参画を担う諸方面の大御所連に混じって、どう見ても院生にしか見えない若い女性が登壇したのでまず驚き、それが閣僚の過半数を女性が占めるサパテロ内閣の男女平等大臣ビビアナ・アイド氏であると知ってさらに驚いた。氏はスペインの歴史上最も若い大臣だそうで、若干31才。男女平等をめぐる世界の動きに、日本がさらに置いてけぼりを食らったような気がして嘆息した。

人が発表する巨大会のこととて、全体像を俯瞰的に把握することはできなかったが、印象としては「肩の力が抜けているな」というところか。前回の韓国での大会は、国威発揚という言葉がふと頭をよぎるような、大々的かつ緻密な計算のもと非常に良くオーガナイズされたものだったが、今回はその意味

では拍子抜けするシーンが多かった。大会プログラムの大変な誤植に始まり、会場内の案内の不行き届きや食事の手配の不手際など、かつて世界に君臨した地中海の覇者はかなり大雑把な人たちなのだなどの思いを強くした。基調講演の人選が白人に偏っていたり、全体テーマと各発表者の問題設定がどこで交差するのかが不明であったりと、あちこちで不満の声を耳にしたが、どこか突き抜けたこだわりのなさがかえって気持ちよくもあった。アメリカ型の効率主義グローバリズムに結局は染まっている我々の前に、まったく違った価値観の磁場が吸い寄せ、形成してきた歴史と人間のダイナミズムが突きつけられたわけである。それは男女平等の意識にも何らかの影響を与えているに違いない。韓国に比べ、男性の参加者が格段に多かったことも特筆に値しよう。

ともあれ帰国して同道した友人と語り合うのは、スペインには観光で行くのがよからうということ。3年後はカナダだそうで、今から色々楽しみである。

韓国女性学会開催のご案内

韓国女性学会が下記の日程で開催されます。

とき: 2008年11月15日(土)

ところ: 西江大学(Sogang University)

基調報告(10:00-12:00): Feminist Response/
Strategy to Neo-liberalist Turn

報告者&タイトル

上野千鶴子: Neo-liberal Reformand Back-lash against
Feminism

Cho Hyoung & Cho Haejoang Cho: Neo-liberal Turnand
Return of Mothers

Lee Hye-kyoung: Post Neo-liberal Paradigm of Social
Welfare and Gender

会員の著作紹介

伊藤セツ 『女性研究者のエンパワーメント』ドメス出版・
2008年7月(税込み2100円)

岡野幸江 『女たちの記憶(近代)の解体と女性文学』 双文
社出版・2008年5月(税込2625円)

金井淑子編著 『身体とアイデンティティ・トラブル』 明石書
店・2008年5月(税込2520円)

篠原収 『男女共同参画社会を超えて』 薪水社・2008年4
月(税込2310円)

杉田聡 『「日本は先進国」のウソ』 平凡社新書・2008年6
月(税込777円)

杉田聡 『AV神話—アダルトビデオをまねてはいけない』 大
月書店・2008年7月(税込1785円)

田中かず子・内藤和美他(計12名)著・上野千鶴子、大熊由
紀子、大沢真理、神野直彦、副田義也編 『ケア その
思想と実践② ケアすること』 岩波書店・2008年5月
(税込2310円)

以下の要領で会員のみなさまの著作を紹介します。掲載ご希望の方は、ニュースレター担当者までご連絡ください。

- 1) 会員が執筆・編集している単行本(分担執筆含む、雑誌をのぞく)
- 2) 1年以内の発行物
- 3) ご本人からお申し出があったもの
- 4) 寄贈は要件としない

ニュースレター担当: 青山薫
伊田久美子

30周年記念大会企画委員募集のお知らせ

日本女性学会は2009年に創立30周年をむかえます。第15期幹事会では、今後の女性学の発展と充実をめざして会員のみなさまからのご意見をひろく取り入れた記念大会にするために、企画委員会を立ち上げることといたしました。この企画委員会に参加して、記念大会の内容やプログラムの作成に積極的に参加し、幹事とともに検討して下さる委員(5名程度)を募集いたします。

〈応募方法・締切〉

名前、連絡先を明記したメールを、2008年9月25日までに以下のメールアドレスまで送ってください。

メールアドレス: (担当幹事:海妻・柚木)

- * 本件に関する問い合わせも上記にお願い致します。
- * 応募者多数の場合は先着順となりますのでご了承ください。
- * 学会員であればどなたでも応募できますので、若手の方や会員歴の短い方などもご遠慮なくご応募ください。
- * 第一回の記念大会企画委員会は10月4日(土)11:00~12:30に立教女学院短期大学にて開催予定となっております。なお、旅費等の補助が出ます。